

新免 貢（神戸松蔭女子学院大学）

はじめに

言葉はコミュニケーションの道具であると言うのが通り相場になっている。ところが、そもそもコミュニケーションの方法は、単純かつ乱暴な言い方をすれば、人の数の分だけある。コミュニケーションの学問的・実践的方法論は多々あろうが、口数の多い人間から寡黙な人間に至るまで具体的に生きている人間同士の間でいろいろな仕方のコミュニケーションは成立しうるものである。他方、言葉というものはコミュニケーションの道具以上のもの、もっとはっきり言えば、比類なき武器である。人間は単に言葉を使っているだけではなく、言葉を武器にして生きているのである。言葉は単なる文字の組合せどころではない。言葉はそれ自体背後から人を前に押し出していく力でもある。

しかしながら、言葉を媒介とする相互の意志伝達としてのコミュニケーションにはやはり限界がある。というのは、表現能力も各人によって微妙な差異があるであろうし、また、使っている諸々の言葉の意味やニュアンスも辞書が定めている語義の範囲と必ずしも一致するわけでもなからうからである。さらに厄介なことに、人それぞれの表現の癖とか傾向もある。当学会の追求する効果的な英語コミュニケーションも、書かれた文字によってであれ口頭による言葉によってであれ、必然的にそのような制約を受けているのである。

本稿はそのような基本認識に立って、まず第一に、英語コミュニケーションの上達方法以前の事柄としての動機の問題（「動機が方法論に先行する」）、第二に、知的活動としての英語学習（「言語学習は徹底的な知的訓練である」）、そして第三に、書かれた文字を対象とする典型的な知的コミュニケーションとしての翻訳作業（「翻訳はわかりやすい言い換えなどではない」）について具体的な事例を引き合いに出しながら論じていく。

## 1. 動機が方法論に先行する。

さて、英語という言語は今や世界共通のコミュニケーションの有力な媒介手段となっている。こういう事態から、英語を学ぶ必要性が高まってきたという一般論を引き出しても意味がない。英語を母国語としない世界中のいろいろな人々が様々な領域で生活するために英語を学び、使い、武器にしているという事態に我々は直面していると言うべきなのである。従って、我々は否応なしにこの言語を使う実際的な必要性があるわけである。それでは、いかにして英語を学ぶのか。しかし、一口に英語学習といっても、一体全体何のために、どういう水準で外国語としての英語を学ぶのか、すなわち、「あなたの場合、英語を学ぶ実際的な必要性は何か」という動機の問題が実際の学習よりも先に問われねばならない。

例えば、学校のカリキュラムにおいて必修科目と定められているので、仕方ないから英語を学習している、正確に言えば、学習させられているという消極派もいるであろう。入学試験合格をめざす英語学習者もいるであろう。語学や音楽を趣味に持てば人生暇なし、という流儀で英語学習を趣味としている者もいるであろう。仕事上外国人と接触するので

片言でも英語による会話ができなくてはならない、という理由で英語を学ぶ者や、将来必要だからというので時事英語を学ぶ学生もいるであろう。あるいは、学問研究の世界に身を置いているので文献を処理できるくらいのレベルで英語をどうしても使いこなさないといけないという者もいるであろう。このように英語学習の動機や目的は人によって多種多様である。しかし、これらの動機や目的は個人差はあっても結局は同工異曲であって、どの動機や目的が正当であるかは決められないし、また実際決めつけなくてもいいのである。

さらに、各英語学習者の動機によって方法も当然変わってくる。例えば、簡単なコミュニケーションを例にとってみよう。

‘May I help you?’

‘I’d like some perfume.’

こういうレベルのやり取りを英語で実際にする必要のある者に対して、シェークスピアの名作『マクベス』を原書で読ませて英語力を鍛えようとするのは、愚の骨頂であろう。それは、片言の日本語を覚えようとする外国人に対して『源氏物語』を読ませることと同じくらい滑稽でさえある。何か特定の方法がどの英語学習者にも通用するというわけではない。それよりも、自分は何のために英語を学ぶのかという動機の認識から英語学習が始まる。かくあるべしという方法論はその次の段階の課題となろう。そして、「英語学習の方法」と言っても、そもそも「最も適切な方法」(*the method*)があるというふうには考えるべきではない。「最も適切な方法」(*the method*)という言い方自体が疑わしいのである。むしろ、実際は「諸方法」(*methods*)があると考えの方が英語学習者たちの現実に即している。人によって英語を学ぶ動機が異なる以上、方法の多様性は認められるはずである。英語学習の方法に関する種々の書物が書店に洪水のようにあふれている現状を見よ。ただし、それらの書物が説いている諸々の方法は、欠点はともかくも、それなりの根拠や長所があるだろうから、互いに排除し合うのではなく、互いに補い合うものとして活用されると良い。ところで、「方法」と訳される‘method’の語源は‘*méthodos*’ (*methodos*)というギリシア語の女性名詞に由来する。同語は、‘after’を意味する前置詞‘*μετά*’ (*meta*)と‘way’を意味する女性名詞‘*ὁδός*’ (*hodos*)との組合せから成り、文字通りには、「求めること」、英語の単語で言えば、‘pursuit’に近い語である。古代ギリシアのプラトン、アリストテレスなどは、知を追求すること、そして、その方法、仕方という意味で問題のギリシア語‘*méthodos*’ (*methodos*)を用いている。<sup>(1)</sup> そういう観点から見れば、英語学習「方法」も、知的追求としての方法と関連していると言わなければならない(この点に関しては、本稿の次項を参照せよ)。ただ、我々が英語学習においてあまりにも一つの特定の方法にこだわりすぎると、せっかくの方法(*méthodos*[*methodos*]: *method*)がかえって、人を惑わすこと(*μεθοδεία*[*methodeia*]: *deceit*)になる恐れもあろう。英語学習方法の場合、その方法が惑わしではなく、有効な方法となる前提条件は、英語を学ぶ側の実際的必要性である。そこで、その実際的必要性が英語コミュニケーションにいかに関立つかを物語る事例を二つ紹介することにする。

最初に紹介するのは、筆者自身が昨年通訳として体験したあるインド人の英語である。彼はインド南部のタミール・ナドゥ州から来日したキリスト教指導者であった。彼の母国

語はタミール語であり、英語は彼にとってはあくまでもコミュニケーションの道具でしかない。周知のように、インド人の英語はかなり特徴があり、非常に聞き取りにくいとされている。なるほど、インド人のすべてが聞き取りにくい英語をペチャクチャしゃべっているというのは偏見であるが、そのような一般の評判は、あながちはずれてはいなかった。例えば、母音の長さが一貫していないことが珍しくない。また、二つの音節から成る単語の場合、母音が同じ発音になることもある。‘tɔʊtl’ と通常発音される ‘total’ という語が ‘totol’ とか、 ‘torol’ に聞こえたりするのである。また、 ‘world’ と ‘word’ の両語が同じように発音されたり (wé: rd) 、 ‘ðæt’ と発音される ‘that’ という語が ‘dat’ 、 ‘thought’ という語が意味の全く異なる語 ‘taught’ (tɔ: t) と発音されているように聞こえたりする。それらに加えて、文法上の不正確さもよく見られる。例えば、不可算名詞と可算名詞との区別があいまいどころか、どういうわけか意識さえされていないのである。 “ 1032 arson took place. ” といったような表現が平気で堂々と使われている。その他にも文法規則を逸脱している諸例を掲げておこう。

“ *They (=The Brahmins of India) born as Brahmins because of their disciplined Karma and others due to their bad Karma born in lower castes.* ”

“ *Among Dalits<sup>(2)</sup>, female members are treated more worsely by Hindus.* ”

“ *Casteism only made the Dalits in India to convert themselves into Christianity.* ” (※ ‘casteism’ は ‘caste’ を意識した造語であろう。)

上記の類いの表現がただでさえ聞き取りにくい発音で一時間半にもわたって口をつついて出てくるので、通訳をつとめた筆者は、彼が口角泡を飛ばしながらまくし立てている講演の最中、「いい加減にしろ！」という感じで何回か腹立たしい思いがした。ひょっとすると、彼の英語では日本の大学入試合格は無理かもしれない。しかし、たとえ文法的には不正確だとしても、そのインド人指導者の言い分は聴衆を圧倒してしまった。なぜなら、彼の話は、我が耳を疑いたくなるような苛酷なインドの現実に関わる凄まじい内容（貧困、婦女暴行、殺人、放火など）であったからである。確かに、彼は指導者として神学校で教える側の立場にあるにもかかわらず、彼の英語は決して洗練されたものではない。H. ブラッドリーは例の名著においてインド人の英語を ‘Babu English’ と呼んでいるが<sup>(3)</sup>、そのインド人指導者の英語はそのレベルでもなさそうだ。しかしそれでも、相手にぜひとも言って伝えねばならないと思っていることを語ったという点では、彼と聴衆との間には究極のコミュニケーションが成立したことになる。つまり、彼は伝えるべき話題や自分の考えを持っていて、英語を使ってそれを人に語っていく実際の必要性があるから英語を使うのであって、英語が好きだから英語を使っているのではないわけである。文法的な正確さをもって中味の無い陳腐なことを語るよりは、むしろ、文法的には不正確で稚拙な言葉づかいながらも心意気（スピリット）をもって内容のある話をする方が効果的なコミュニケーションが期待できることを彼の講演は身をもって見事に証明したことになる。確かに、コミュニケーションにおいて文字通り肝腎なのは、腹の底から言いたいことがあるかということである。逆に、腹の底からは是非とも言いたいと思っているわけでもないことが、コ

コミュニケーションの内容となっている場合は意外と多くあり、その一例を紹介しよう。

“It’s a nice day, isn’t it?”

“Yes, it is.”

これなどは、英語学習者なら一度は耳にし、口にした覚えがあると思われる「実用英会話」の一種である。しかし、どう考えてもこの種の「実用英会話」は英語コミュニケーションの水準にあるとは言い難い。というのは、互いに晴れた空を見れば、そういう話題は無言で済む程度のものだからである。実際、「空が晴れている」とか「雨が降っている」などの会話は自己表現からは程遠いものである。むしろ、「私はこう思う」とか「私はこうしたい」などのような主体的な表現の方が効果的なコミュニケーションには役立つ。そして、その種の主体的な表現ができるかどうかは、英語学習の方法論以前の事柄である。学習者がふだんからどういう考えや関心を持っているのか、人に伝えるべき話題なりテーマなりを明確に持っているかどうか、などといったことが本質的に重要になってくるを得ないのである。こういう側面は、学ぶ側と教える側の双方に関わることであろう。

さて、次に紹介する事例は、あるインドネシア人青年の英語である。ある大手企業で研修を受けるために彼は半年の間日本に滞在していた。その間、筆者は、研修先の企業に提出すべき報告書の彼の英語原稿を日本語に翻訳したことがある。アメリカ合衆国にも留学しことがあるという彼の英語は、例えば、次のようなレベルのものがほとんどであった。

“ Briefly Report ”

“ My activit-ies is as follows.”

“ A construction have established in 1957. ”

“ The company have field of business is as follows.”

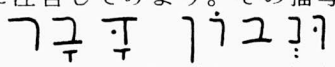
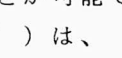
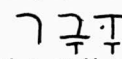
上記の英語は、決して正しいとは言えないであろう。日本の中学生の方がまだましな英文を書けるかもしれない。しかし、彼の英語に対して日本の学校英語の基準で「不合格」という烙印を押してしまうのは、不適切である。本国に帰れば、婚約者もおり、扶養しなければならない親・兄弟がおり、本国の会社での昇進も約束されている彼にとっては、英語は生きていくために使わざるを得ない言語なのである。しかも彼は、建築設計といったかなり専門性の高い分野を仕事としており、生活をかけて彼なりに一生懸命に英語で報告書を作成したわけである。たとえ拙い英語であっても、その言わんとすることはわかる。

以上の二つの事例を見るだけでも、英語を学ぶ実際的必要性が単なる学習よりも優先することが明らかであろう。しかしだからといって、英語学習をいい加減にしてもいいという論法に筆者は断じて与しない。その点を踏まえて次項に移りたい。

## II. 言語学習は徹底的な知的訓練である。

言葉というものは、極めて文化的なものである。従って、一朝一夕に外国語という異文化のものを習得できるわけがないのである。戯画化して言えば、英語の学習者も英語を教授する者も、英語という大海原の真ん中で立ち泳ぎをしているようなものである。当然、

その海底には足が届くはずはないし、途方もなく広い大海原で自分の泳いでいる場所を正確に言い当てることなど不可能に近い。しかし、そのような限界はあっても、人間は訓練を通して言葉による自己表現をかなり高めることができる。そのことは、すでに古代において十分に認識されていたことであった。

例えば、紀元前10世紀におけるイスラエル王国の英雄ダビデは、ビブリア・ヘブライカ (BIBLIA HEBRAICA = 諸外国語に翻訳されている旧約聖書の古代ヘブライ語底本) によれば、「…弁舌に秀で…」と描写されている。これは、彼の若い頃の姿を紹介する文脈の中で出てくる描写である。名君として謳われ、武人としても優れ、詩人としての天分にも恵まれたダビデが「弁舌に秀でている」と言われている点に注目してみよう。その描写は、ビブリア・ヘブライカの古代ヘブライ語本文では<sup>(4)</sup>  となっており、'knowledgeable in speech' とか、'prudent in speech' (RSV)<sup>(5)</sup>、'being an able speaker' (NAB)<sup>(6)</sup> などと英訳することが可能である。特に、「秀でる」に相当する古代ヘブライ語「ビーン」(  ) は、'have insight' とか 'discern'、'perceive' などといった意を含む語である<sup>(7)</sup>。これにより、言葉を駆使すること自体すでに古代社会においては知的営みであったことが文献上からも窺われるのである<sup>(8)</sup>。問題の描写は、傑出した將軍政治家ダビデのような公の人物は、ただペラペラと意味の無いことをしゃべったということではなく、弁舌(すなわち、言葉)の面で洞察力・説得力・理解力があり、聡明であったことを物語っているであろう。彼にとっては、言葉は、鋭利な剣同様、強力な武器でもあったわけである。しかも、「言葉」に相当する古代ヘブライ語「ダーバール」(  ) は、かなり広範囲の意味を含んでいる。それは、いわゆる「言葉」や「弁舌」の他に、「知らせ」、「命令」、「はかりごと」、「約束」、「非難」、あるいは、「判決文」、「記録」、「事績」、さらに、「事(柄)」、「仕方」、「理由」、「取引」など実に様々な訳語を当てることのできる語である<sup>(9)</sup>。それらの事柄は人間の生活あらゆる部分に関連しており、そういう意味では「言葉」は人間が生きる上で武器となっているものなのである。これを効果的な武器として使いこなせるようになるためには、やはりある程度厳しい訓練が求められるであろう。

古代資料を典拠としてもう一人紹介しなくてはならないのは、あのアレクサンドロス大王が建てた都市アレクサンドリア出身のキリスト教伝道者アポロである。諸外国語に翻訳されている新約聖書の底本『ネストレ=アールント版ギリシア語本文』(NESTLE-ALAND: NOVUM TESTAMENTUM GRAECE, 27th ed.) によれば、紀元後50年代後半に活躍した彼は、「…アレクサンドリア生まれで、聖書に精通し、しかも雄弁な人、アポロという名のユダヤ人」( Ἰουδαῖος δέ τις Ἀπολλῶς ὀνόματι, Ἀλεξανδρεὺς τῷ γένει, ἄνθρωπος λόγιος … ) として紹介されている。「雄弁な人」に相当するギリシア語 ἄνθρωπος λόγιος (アネール・ロギオス) は、'a man of culture' (= 教養人、洗練された人) が元来の意味に近いとされている<sup>(10)</sup>。言うまでもなく、'λόγιος' ([ロギオス] = 雄弁な) は、'λόγος' ([ロゴス] = 言葉) に由来する。この 'λόγος' ([ロゴス] = 言葉) も、上述の古代ヘブライ語の「ダーバール」同様、意味範囲の広い語である。「理性」はもちろんのこと、「根拠」、「勘定」、「会計報告」、さらに、「説明」、「話題」、「事柄」、「弁舌」など、いろいろな意味がそこに含まれているのである<sup>(11)</sup>。ローマ帝国が支配する当時の地中海世界では、歴史記述作品から契約書、公文書、手紙、領収書の類に至る

までギリシア語で書かれていた。従って、そのような地中海世界におけるヘレニズム文化の一大中心地アレクサンドリアにおいてアポロという人物は生まれ育ち、今日の英語同様広範囲に使用されたギリシア語で、聖書解釈の訓練を受けた高水準の教養人であったわけである。彼にとっても言葉は生きていくための有効な武器であったのであり、事実彼はそのための言葉の訓練を十分に受けた人であったということになる。

上述の如く、武器としての言葉の習得は訓練であるという認識が、古代文献からも与えられた。ただ「訓練」と言っても、極めて短期間のうちに日本語を習得したかつての米軍語学兵たちと同じレベルの訓練を強いてもあまり効果はなかろう。今我々に求められている「訓練」とは、促成栽培という仕方での訓練ではなく、もっと息長く英語とお付き合いしていこうという粘り強い訓練であろう。その場合最も効果的と思われるのは、読むという行為（リーディング）である。もちろん、読むという行為の効用については、外国語学習者のとるべき姿勢を格調高く説得力をもって説いた渡辺照宏を始めとして（『外国語の学び方』岩波書店、1962年）、これまでもあまたの人々が提唱してきたので、今更新たため話題にしなくてもいいと思われる向きもあろう。しかし、当たり前のことを当たり前のこととして主張するのは、希少価値があり、それなりに勇気のいることなのである。結局長い目で見れば、読むという非常に骨の折れる知的作業の積み重ねを通して、習得をめざす異文化の言語を効果的に学ぶことができよう。時には一生に一度しかお目にかからないような単語との奇しき一期一会（あるいは、「一語一会！」）、ただし、これは無論造語）も経験させられるかもしれない。また、単語の意味を辞書で確認するだけでもそれなりに気を使う作業であるが、それは、単語の意味の範囲を調べながら辞書を読むという作業を基本的な事柄として含んでいるのである。辞書に掲載されている単語の語義説明は、あくまでもその単語の意味の範囲を示しているのだから、辞書もまた読む対象となる。そして、辞書も読む対象であるならば、特定の辞書にしがみついてもばかりいられないであろう。最近辞書の種類も増えたが、単語登録や語義説明などの面で、各辞書にはそれなりの傾向があることも意識しておかなくてはならないであろう。そのように辞書を注意深く見ることは、おのずとものを考えるという知的プロセスと表裏一体の関係にあるとも言える。ものを考えることなしに自己表現などできるわけがない。読むという行為自体が、自己表現の武器として言葉を駆使するようになるための一つの訓練または鍛練のようなものである。こういう方法は時間も手間もかかるので、今時もうはやらない古くさいやり方（an unfashionable practice）として学ぶ側と教える側の双方から敬遠されがちであるが、外国語習得の面では案外確実性があるかもしれない。

ところで、読む材料は玉石混淆であるが、今もなお有益と思われるのは、比較的簡潔で力強い文体を誇るE. ヘミングウェイの短編（The Short Stories of Ernest Hemingway, Charles Scribner's Sons）とか、役に立つ表現の宝庫とも言うべき『クマのプーさん』（Winnie-the-Pooh, Methuen Children's Books）などであろう。しかし、それと共に、英語学習者には自分の持つべき専門性を意識させることも望ましい。社会科学を専攻しているような大学生、例えば、法学部の学生であれば、法的ものの考え方を叙述しているH. L. A. ハートの名著“The Concept of Law”（Clarendon Law Series, 1961）を読破するように仕向けるべきであろう。学習者が持つべき専門性は、上述した英語を学ぶ実際の必要性とも直結しているはずだからである。



### Ⅲ. 翻訳はわかりやすい言い換えなどではない。

さて、前項においては、言語学習が知的活動であることが確認された。本項では、そのことが実りある成果となって現れる一つの領域、翻訳について述べることにする。この場合における「翻訳」とは、最近市場に出回っている翻訳機器の高度な「翻訳機能」のことではなく、豊かな感受性を持つ人間が思考力を駆使して取り組む「翻訳作業」のことである。そういう意味での「翻訳作業」は、文字にして書かれた言葉を媒介とするコミュニケーションであるというのが、筆者の立場である。

翻訳は、労多くして報い少なし、とよく言われる。確かに、一つの言語を別の言語に移し変えて表現すると言うのは、途方もない地道な作業である。ドイツ語であれ英語であれ、それを日本語に訳すというのは、苦労も多々伴う。そのことは筆者もしばしば体験してきた。しかしまた、それはやりがいのある作業であり、知的活動そのものとも言えよう。また、翻訳作業は、周知のありふれたことにお目にかかることもあれば、未知の新しいことを発見させられることもある旅に似ているとも言える。もちろん、外国語で書かれたものを日本語に翻訳して、それを商品価値のある出版物として出すというのは、誰にもできる芸当ではない。そして何と言っても、翻訳者は自分が訳出した言葉や表現に責任を持たせられているので、一つ一つの単語の意味の範囲を入念に調べなければならない。さらに、忠実な翻訳者は、翻訳作業に取り組む時には、没個人的にならなければならない。「自分はこう訳したい」ではなく、「著者の言っていることはこういうことである」というように訳されたものが、忠実な訳であろう。キザな文章に出くわせば、たとえそれが嫌いであっても、その文章はキザな文体にして訳出されるべきであろう。できる限りにおいて、下品な言葉は下品な言葉に訳出し、古風な文章はそれに相応しい文体で訳出するよう努力すべきであろう。また、仮定法が目につく文章に出くわしたなら、それが丁寧な言い方を意図しているのか、それとも、責任逃れの言い方をしているのか、などを考える必要がある。翻訳者は、そのように自分を抑えて没個人的になって、自分の訳そうとしている言語と向き合ってコミュニケーションを試みていることになる。これはかなり高度な知的作業であると言わざるを得ない。このように翻訳作業は、テキストとの対話という側面を持っている。対話であるから、そのテキストから離れてはならないはずである。

しかしながら、読者にとってのわかりやすさ、読みやすさ、などといった基準を翻訳作業に持ち込んでしまうと、翻訳しようと取り組んでいるテキストの本来の意図から逆に知らず知らずのうちに翻訳者が遊離していくことになるだろう。こうなると、それはもう翻訳などと言える代物ではない。そのことは、例えば、欧米の文化の背景として息づいているキリスト教の教典としての聖書の翻訳においても露骨に現れている。英語訳聖書であろうと日本語訳聖書であろうと、それらはあくまでも訳 (versions) であって、原典そのものではない。残念なことに、大変立派な装丁が施されていながら学問的には全く信用の置けない粗悪な訳が「わかりやすく読みやすい現代英語」という触れ込みで堂々と出回っているから要注意である。例えば、原典本文から著しく逸脱した大胆な言い換えが無節操になされていたり、原典本文には無い要素を付け加えて訳したり、逆に、訳出すべきものを無視して訳出していなかったり、時流に流されて特定の価値観や立場を反映させたり、勝手に意味を曲げて訳したりしているなど、それらの証拠を一々挙げればキリがないほどであ

ある。翻訳者の良心は、自分が向き合っているテキストの指し示す意味内容を、先入観をできるだけ排除して理解しようとするにある。翻訳作業において、いわゆる「パラフレーズ」式のわかりやすい言い換えとか、10円玉が10枚あれば100円になるというレベルの等価理論 (equivalent system) が幅を利かせるようになると、人間存在の根幹に関わる言葉による自己表現の画一化と知性の貧困が生じるであろう。

#### おわりに

本稿の第二、三の両項目においては人間の言語学習を主として徹底的知的活動の一環として見てきた。しかし他方、第一の項目においても強調されたように、言語学習の基本的前提として人間が食って寝る存在であることを忘れるべきではない。言葉はコミュニケーションの道具にとどまらず、生きる上での武器であることも再確認しておきたい。英語なら英語という言語を使わないと食っていけないのだ、という状況は世界の各地に見られるだろう。そして、我々も何らかの形でそういう状況に首を突っ込んでいることを認識した上で、英語コミュニケーションを追求していくことが望ましいと考える。

#### 注

- (1) Liddell & Scott, A Greek-English Lexicon, 1983, p.1091.
- (2) 'Dalits' : The word comes from Sanskrit. The meaning is 'distressed, crushed, downtrodden people'.
- (3) H. ブラッドリー著『英語発達小史 (The Making of English, 1904)』(岩波書店、寺澤芳雄訳、1985年)、273頁以下。
- (4) Samuel I, 16:18 (BIBLIA HEBRAICA, p.473)
- (5) The Revised Standard Versionのこと(1952年。『標準改訂訳』と呼ばれ、比較的原文テキストに忠実に英訳されている)。
- (6) New American Bibleのこと(カトリック側による注釈付きの最新のすぐれた英訳聖書、1990年)。
- (7) Brown=Driver=Briggs, Hebrew and English Lexicon of the Old Testament, 1977, p.106.
- (8) この点については、クレアモント大学院教授ロルフ・クニアリムの論文が参考になる。Rolf P. Knierim, "Science in the Bible", in *Word & World, Volume 13, Number 3, Summer 1993*, pp.242-255.
- (9) Brown=Driver=Briggs, op.cit., p.182ff..
- (10) F.F. Bruce, The Acts of the Apostles: Greek Text with Introduction and Commentary, Wm. B. Eerdmans Publishing Company, 1990, p.401 (See a note on Acts 18:24) .
- (11) Liddell & Scott, op.cit., p.1057ff..